

2021年 京生研基調提案

「深く共感すること」への再挑戦を通してKが通うに値する学校づくりを追求しよう

2021年6月26日

1、コロナ禍のなかで広がる経済格差と教育格差

新型コロナウイルス感染症の世界的流行にともなう混乱の中、度重なる緊急事態宣言の発令とワクチン接種の遅れ、そして内外からの批判があるなかでの五輪強行など、国政のかじ取りの危うさが露見し、この国の在り方や自分たちの生活のこれからについて、不安や疑問がかつてないほどに高まっている。そんななか社会の影響をダイレクトに受けるのが子どもたちである。

学校再開後のスピード授業のせいで学力低位の子どもや発達障害への支援の必要な子どもが取り残されたままになっている。学校行事の中止や縮小や改変により、上級生がちからを発揮できる場面が極めて少なくなり、子どもたちが自信をもてないままになっている。従来学校がもっていた高学年の教育力が発揮できなくなっている。行事を前にした不登校生徒の参加の葛藤機会が減り、その子どもと集団の交わるチャンスが減っている。親が子どもの行事や部活動を参観する機会が奪われ、子どもの成長を目にし感動する場面が減っている。これらの事態が各地で散見される。また、休校中にオンラインゲームに明け暮れたり、家に閉じこもる中で、「友達と交わることが面倒」、「一人で家にいる方が楽」と感じる子どもの増加も報告されている（京都教育センター研究集会、生活指導研究会、2020年12月20日「コロナ禍の小学校の様子と子どもたちの様子」より）。

GIGA スクール構想の導入は、多忙な現場をさらに忙しくさせ、不登校の子どもに対してオンライン授業の配信を行い、そのことをもって出席扱いとみなす動きとなるなど、なぜ不登校になっているのかを問題視することなく、不登校の子どもを排除する行為を正当化するシステムにつながる危うさを孕んでいる。小学校では、iPad を渡しておけばとにかく子どもが落ち着くという理由で、子どもに休み時間などにiPad を触らせる事例も聞かれる。子どもどうしが体をぶつけ合いながら成長していく発達機会が奪われている。

3カ月にわたる休校が解除されたとき、多くの子どもは友達との再会を喜び、学校に通う喜びを噛み締めたであろう。それは不登校の子どもも同じで、少なくない不登校の子どもが学校への期待を新たに再登校した。しかし、上記の学校は子どもたちの期待を裏切り、極端に短い夏休みや、子どもの実態を無視した授業の詰め込み、行事縮小の代わりにスピード授業、そしてソーシャル・ディスタンスという大義名分にもとづいた様々な規制を通して、子どもの願いを斥けた。

教師の生きづらさの一つは、教師をして、スタンダードを指導する末端の管理者に成り下がってしまうことにある。教師の当事者性が失われた今、スタンダードを指導することが教師としての責務を果たしていることだと感じとらざるをえない職場状況を生きている。そのような教師の息遣いは子どもたちに伝播し、子どもたちの生きる世界をますます息苦しいものにしてしまう。

今、自己責任と学力競争、スタンダードに支配された学校にしがみつくことをやめた子どもたちが不登校という形で学校から撤退している。私たちはそのような子どもに関わりながら、彼らが生きやすい、彼らが生きることのできる教室、学校とは何かを考え、つくっていく必要がある。そのような実践構想を持つことは他のすべての生徒が生きやすい教室・学校をつくることにつながる。

2、「深く共感すること」への再挑戦 ～子ども達の抱える傷への着目～

今、日本の子どもは7人に1人が相対的貧困に陥っていると言われている。しかし、この貧困は、住む家がないということや食べる物が無いといったような絶対的貧困の尺度では見えてこない貧困である。それだけに外部からその困り感が見えずらく、必要な支援を届けにくいという課題があると言われている。非行問題を抱えた子どもは学級や学校を揺るがし、それだけに放置できない問題として教師集団の前に立ちふさがった。しかし、今の子どもの不登校や引きこもりの問題は、学校体制を揺さぶるほどの影響力を持ちえず、教育現場から不登校の子どもたちが忘却されていく所以となっている。課題の大きな子ども達に私たちが関わっていくときの配慮は、職場内からは「甘やかし」と見なされることも少なくなく、また、そのような配慮も本人に拒絶されるなど、実践の中で数あまたの軋轢を抱えることになる。子どもたちの抱える苦しみに共感し、自立に導く実践を展開することは容易なことではない。

2020年の全国基調では、これらの軋轢を乗り越えるために、成長のストーリー・来歴のストーリーを提起した。以下、『全生研 2020 年度基調提案 「子どもと教師の生きづらさを読みひらき、仲間と共に生きる喜びを追求しよう」の批判的な継承・発展の視点とわたしたちの実践の方向性』より、その重要な趣旨を引用したい。

共感の質を高めるために必要なことは、単なる成育史の聞き取りではない。ましてや、当該の子どもにまつわる種々の出来事を時系列で羅列することでもない。成育史を聞き取る上で大切なことは少なくとも2つある。そのひとつは、「この子どもの〇〇な行動の理由と意味がわからなければ、その子どもを排除する勢力に負けてしまう」という切実さである。もうひとつは、「なぜ、この子どもは〇〇をせずにはいられないのか」という問いである。こうした切実さと問いに導かれながら、子どもの成育史を聞き取るのである。ここで、「分析の確かさに基づく実践の見通し」を求める阪上と楠本は、切実さと問いに導かれた成育史の聞き取りを通して浮かび上がってくる事実とその意味に涙することをもって共感の質が高まったなどとは言わない。あくまでも実践の見通しを示すことができ初めて、すなわち「来歴のストーリーと成長のストーリーを描く」ことができ初めて、(楠本注、知的理解を通じた)共感の質が高まりつつあるとするのである。その際、鍵となるのが発達課題の視点である。聞き取った成育史の分析を通して、当該の子どもが「〇〇をせずにはいられない」のは、その子どもとおとなとの、あるいは子ども同士の関わり合いのなかで△△という発達課題を乗り越えることができないまま現在に至っているからではないかという仮説を立てることを、2020年度全国基調は求める。さらにこの仮説に基づきながら、「では、現在の時点でその発達課題への再挑戦をその子どもに保障していくためには、どのような実践が求められるのか」を考え、具体的な指導方針を明確にしていくことをもって、共感の質が高まったとみなすのである。

このような方針を持って実践を進めるとき、子どもを分析する上で、ひとつの重要な視点として指摘されているのが、子どもが抱える「傷」への着目である。

このような、「傷」に着目することで浮かび上がる状況があるからこそ、2020年度全国基調が提起した「深く共感する」ことを再検討する必要があるだろう。すなわち、それぞれの実践におけるKの行為・行動の背後にどのような「傷」が隠れているのか、その「傷」はいつ、誰に、どのようにして刻みつけられたものに由来するのか、その「傷」はなぜ、今なお回復しないままにあるのか等々について、Kの生い立ちが「語られる」

ように、換言するならば、K が教師や仲間たちを「語るに値する存在である」と実感することができるように指導を構想していくことが重要となるのである。

3、今後の実践視点の整理と提起

私たちの目の前にいる課題の大きな生徒が不登校に陥ったり、様々な行動化を通して問題を起しているのは、子どもたちが「傷」を抱えて存在しているからである。私たちは子どもの不登校状態や種々の問題行動に「もうこれ以上傷つきたくない」という願いが隠れていることを読みとり、配慮とともにすべての指導をスタートさせていく。そのとき集団分析も欠かすことができないものであり、最も課題の大きな子どもは誰か、その子への取組を展開する上で必要なクラスや職場への配慮は何か、その子への取組に参加できる子どもは誰か、また、その子どもへの取組の中でどのような力を集団内に育てるのか、知らず知らずの間にその子どもを傷つける行為に加担してきた集団の現実をどのように暴き立てるのか、などを構想しながら、実践展開していく必要がある。以下、兼田の久美子実践を通して具体的な実践視点を検討していこう。

4、久美子 (K) はなぜ「学校」から撤退してしまったのか

① 学校状況の分析

「既存の集団が孕む課題に由来する権力性や暴力性によってもっとも抑圧され、もっとも傷つけられている子ども (=K)」は誰かを問うことから、集団分析をはじめ。

久美子の所属する「学校」は、塾加入率が非常に高く、公教育への期待の薄い地域に位置する。何を判断するにしても「保護者ファースト」であり、「教育のサービス化」が進み、「楽ちん・便利」を大人も子どももみんな追求している。(ように見える。) 表面上の優しい対応は、決して「共感的指導」によるものではなく、保護者や生徒への迎合であり、放任ともいえる状況に陥っている。「もめないこと、トラブルを起こさないこと」、生徒の失敗は生徒の自己責任とし、「学校批判されないためのアリバイ作り」がしっかりなされることを重視して対応を考えることが多い。そのため、起きた事象への処理に終始し、解決に至らないことが山積している状況である。また「クレーム」として強く訴えない限り、動いてもらえないことが多く、その結果やむを得ず「クレーム」を言う方が現れ、委員会や行政を巻き込み、特別な対応をすることになってしまうが故に、結果的に誰にとっても不公平感を生むという悪循環に陥っている。

② 久美子の分析と撤退理由

中学校入学時の久美子は、懸命に手を挙げて発表しており、理解力も乏しくはなかった。その頃から、場の空気が理解できず、ちぐはぐな言動も多々見受けられ、暗い眼をしており、気になる生徒ではあった。しかし、久美子があれほどあつという間に、ほとんど「学校」にはなすすべもなく、崩れた生活のなかで不登校になり完全にひきこもってしまったのはなぜだったのか。「滑り落ちていった」という感覚が近い。

2年時から、久美子の担任をするにあたって、1年時の担任からは彼女について、ひどく表面的な情報しか得られなかった。保健室や、そのほかの子どもたちからも、核心に迫るような話は聞けなかった。学年には、久美子以外にもこのような状況にある生徒が多く存在し、「学校体制」をゆるがさない限り、「排除・忘却」されてしまっているのである。

久美子の不登校の背景には、「貧困・ネグレクト状況」という生活のなかでの苦しみと、そのことに起因する発達の未成熟により「同世代の友人からの排除・いじめられた傷」がある。「幼少期の性被害による PTSD の発症」という 1 年時の精神科の医師の診断は、傷付きを言語化出来ずに身体化し、誰からもケアされてこなかったことの現れではないか。

久美子を「不登校・ひきこもり」状況へ追いやり、排除・忘却してきた新自由主義の思想と対峙し、彼女の自立のたたかいに参加することで、久美子とともに「学校」を相対化していきたいと決意した。それは、同時に私自身のなかにあった「仕方がなかった・手の打ちようがなかった」と、担任でなかったことを言い訳に看過してきた、自身の思想と実践の弱さと向き合うことでもある。私は、久美子（K）を実践の軸にすることで、「学校」のなかに踏み留まって、弱者切り捨てから弱者尊重へ、誰もが人間として存在そのものを互いに祝福し合えるような世界を創り出したいと願って実践をはじめた。

5、久美子とつながる・久美子がつながれる集団づくりのスタート

① 「集団は楽しい・安心できる」という感覚を創りだす。

コロナ禍で、人と会うことへの恐怖心すら植え付けてしまった休校。久美子を抑圧しているのは、集団の側にある「異質排除の価値観」であり、こぼれ落ちないように必死にしがみついている生徒たちにとって、するりと落ちていった久美子の存在は無意識に恐怖心をかき立てる異質な存在である。閉塞感が強まったとき、集団の攻撃性は露見する。だからこそ、安心できる自由な空間を学級に保障することで、この学級では 1 人ひとりが大切にされるということを実感させていくことに力を注ぐ。

コロナ禍によりもたらされた鬱や心身の不調を訴える子どもたちの情勢を伝え、「人が居るって安心できる」という時間や取組を、沢山生み出すチャンスに変える。集会では安心感を生む話をする・特別活動から「非接触レク」を沢山提案する・子どもの笑顔が輝く姿や子どもの声を掲示物にして見えるようにする・毎日の通信で学年の教員に発信する…地道な積み重ねによって周囲の信頼を得ていくことが大切だ。生徒たちに、「誰かを排除する」より「楽しい」ことがいっぱいあることを実感させたい。「祝・再開」「テストお疲れさま会」「BD企画」「終学活 5 分レク」「学期末のクラスまとめの会」「転校生の歓迎会」など、色んな名目で、レクの時間を沢山生み出す。分散登校での企画や、班企画など、生徒主体のものにすることで、自治の力の形成につなげていく。

「レクの時間を作ることが難しい、また、現場の見通しが弱く、子どもに準備させるところまで手が回らず教員主導になることがある。【他クラスとの統一】や【遊び（トラップ）はやめてください】」などの声が強まる情勢への懸念はあるかもしれない。しかし、はじめは教員主導でも良いのではないだろうか。その内、やりたいという声が上がって来て代われば良い。生徒たちは、「人と交わる楽しいこと」に飢えている。時間も、長くても、短くても、（たとえ一瞬でも）できるものは色々ある。伝言ゲームやマジカルバナナ…学習と遊びを連動させれば、ショートレクはいくらでも入れられる。

むしろ、「遊ばせると気が緩んでしまうのではないか、何もかもきちんとさせなければ」など、自分自身のなかにレクを妨げる要素はあるかもしれない。提案される学活や総合や道徳などの内容について、これは短時間で済まそうと思ったら、思い切って半分程時間を余らせて「交わりの時間」の確保をすることもある。基本的に、提案された内容を目的さえしっかり捉えて、吟味していけば、自由な時間を生むことはできる。

遊びのなかでリーダーを見つけ、遊びを通じて評価しながら、異質共同への思想的対話場面を生み出していく。どのレクには誰と誰をつなぐ目的があるのか、どんな力を付けようとしているのか、班のなかではまずどんな問題から取り組むのか、時々の「楽しい」話題をもとに、リーダーに個別接近し、対話していく。

久美子への担任からの一挙一動を、生徒は気にもとめていないかのようだが、実によくみている。久美子にこだわって実践展開しつつ、平等性をはっきりと示し、実感させていくことが、久美子に対し「排除しない程度の支持」を生み出すために必要である。

② 基本的信頼感の獲得

久美子の欠席は予測通りであり、個人接近のチャンス、逃す手はない。登校できなかった日こそ、久美子のもとへ足を運んで、彼女を知るヒントが得られる。玄関先でも、アパートの踊り場でも、どこでもいから、まずは行ってみる。

そして、最も違和感のない「勉強」を教えるという名目で、対話の機会を得る。同時に学級では「欠席を心配する生徒」は誰で、「無関心な生徒」は誰か、他の生徒の欠席の際も同様の対応をすることを意識して、ごく自然に、欠席を話題として生徒たちと対話をする。過去を知るきっかけになることが多い。行っても「会えない日」は、一言メッセージをポストに残したり、欠席取組として公的に位置付け、その日のプリントや記録を届けたりすることもできる。

方法は様々だが、この地道な積み重ねの中に、「どんな自分も大切にされており、決して排除されない」と久美子が感じられるきっかけとなるアプローチが含まれている。欠席し、昼夜逆転生活に陥ることは久美子にとって「否定的な言動」の1つの表れだと思うが、そうならざる得ない苦しみを知ろうとしていくなかで、「本当は話を聞いてほしい・みんなと交わって楽しく学びたい」と願う「もう1人の久美子」が発見できたとき、対話は本格的になっていく。そして、そのなかで担任が、久美子にとって基本的信頼感の抱ける他者として、位置付いていく。

③ カミングアウトへの応答

久美子の自立に伴走するなかで、夏休み前に久美子が苦悩をついに打ち明けてくる。「母と一緒に死のう、と言われた」というショッキングな内容である。しかし、これまでから家の中の様子、鬱病を患う母と、その様子を気遣って小声で話す久美子を見てきていたため、起こり得ることだと思われた。

担任として、慌てふためくのではなく、今までおそらく自己内に撤退し、目を背けてきた事柄へ、解決の道を求めて打ち明けてきたと捉える。その久美子の勇気へ敬意をもって応えることが喫緊の課題である。管理職・学年主任と連携して、その後の対応を構想し、この機会に今まで、子育てに非協力・無関心であった父へのアプローチに踏み出し、「安全確保」という名目で、兎相との連携、本人に私の携帯番号を教えること、夏休み中の小集団づくりを行うことなどが、公的に認められた。

そして、そのことがあったが故に、夏の懇談は母の負担軽減という名目で、久美子の家で行い、時間をかけて、母の子育ての苦勞に共感しながら、親子2代のこれまでの来歴とその苦悩をじっくり聴く時間を持つことができた。久美子のカミングアウトのおかげである。その後、担任として、久美子の緊急避難所的な役割を担っていくこととなる。

「生育史を語るに値する存在」として選ばれたことにより、大きく実践のステージが変わり、共闘的指導に展開していくことが可能になる。

6、個人指導と集団指導の統一展開

① 共同グループを立ち上げる

久美子の「心の傷」を消すことはできない。しかし、「包帯」を巻くこと、ともに見つめることならできる。目を背けるのではなく、あえて「心の傷」を可視化し、語り合っていたなら、傷付いた過去を意味付けなおし、その「傷」も含め自分自身を愛して生きていけるのではないかと考え、久美子とともに、語り合いながら自立へ向かう共同グループを創り出すことにした。

夏休みの宿題を一緒に行いパワーチャージする会「ほっと time」の参加者を募り、久美子の自立へ向かう小集団づくりをはじめた。カミングアウト直後にこの会を結成したことの担任の意図を、久美子は直感的に受け止め、すぐに手を挙げてきた。しかし、夏休み前半はコロナに阻まれ実施中止、後半2回は実施できたが、肝心の久美子は調子を崩し参加できなかった。

この会に学年教員が複数参加し、一緒に楽しんで過ごすことができたこと、このメンバーのなかに、多かれ少なかれ久美子と共通している発達上の課題や「いじめられたことによる心の傷」などが垣間見えたことから、久美子の自立を支えるために必要な小集団になるに違いないと、確信を持てたことが成果であった。翠は帰り際の雑談で、久美子が小学校のときいじめられていたこと、自分は久美子が好きだということをそっと教えてくれた。

その後、メンバーのアキオの不調をきっかけに、11月末に、再度「P4C 子ども哲学」の会として立ち上げ、「オープンダイアログ」という対話の手法にヒントを得て、放課後の居場所集団づくりを行っていった。この集団が、3学期に、久美子への迫害を告発する共同グループとして、久美子をケアしさらに久美子をエンパワメントする機能を発揮していくこととなる。

② トラブルの原因を読み解きながら、心身の不調を支える

「ほうきのトラブル」では、久美子の担任に対して言うことと母に伝える内容の食い違いが明らかになる。「スッキリしました」とその場では言い、家では「謝って欲しかった。」と泣いていた久美子。「その時々、久美子の言うことが変わるのはなぜか。」久美子の言動には矛盾が生じていた。おそらく、トラブルのたびに祖父が学校に乗り込んでいった過去の出来事から、対他関係を自分で修復するすべを得られずにきたであろうことや、「謝りよったか？」と祖父が久美子を擁護し、相手に全面的に否があるとする結論を求め、対話してきたことが伺える。

もともと、思い込みが強い久美子にとって、その価値観では、さらに生き辛いだろうと思うが、時間をかけて修復していくしかない。その場では、「モヤモヤさせたまま帰して申し訳ない」と母に謝り、時間をかけて解決したいということを伝えた。

2学期の久美子は、心身の不調を訴え、欠席が続いた。誇大妄想と思われるような「登校中、岩が足に落ちてきて足が動かない」「気持ち悪くなって吐いたら血が出た」などの発言があり、友人関係への不安も訴えていた。また、夜中に倒れ救急車で運ばれたり、

ペットの死による鬱症状が見られたり、深夜徘徊や爪への自傷など、極端な出来事が頻発していく。

母と相談し、次の診療に一緒に行かせてもらうことにした。ともに診療へ行ってヒントを得るといった目的をもつことにより、母とも久美子とも一緒に歩く姿勢を見せることができる。「医師」という存在がいることで、否応なしに背負ってしまう「学校」感を取り払い、久美子と母を閉塞感から解放し、一緒に考え、視野を広げるチャンスにすることができる。

「高校進学は久美子の自立のステップではあるが、すべてではないこと、久美子の苦しみは久美子だけの問題ではなく、社会の問題でもあること、今の苦しみはずっと続くわけではないこと、学校に来ることがすべてではないこと、心身共に辛い状況にある久美子が来たくなるような学校だったら、きっと他にも救われる子がいる学校になること、そんな学校と一緒に創りたいこと」などを様々な機会に、久美子と母に伝えていった。診療を1つのきっかけにして、自分で「月曜から行く」と教科書を取りに来た久美子は、その後、安定し始めた。

③ 学級・学年集団を前進的なトーンで創っていく

「コロナに奪われた行事や仲間との時間を自分たちの知恵とチカラで取り戻そう」という目的で各学級から有志の企画委員を組織し、学年分析をしながら各学級の意見をアンケートで吸い上げ、秋のスポーツ企画や冬のCM制作などを運営し、生徒主体の行事づくりを行った。

負担を嫌う学年教員団への分析をもとに、提案時期を遅らせたり、「映画」から「CM」へと内容を再検討したりするなど、係で綿密に打ち合わせながら、実施へと漕ぎつけていった。負担軽減が、生徒の発達権を奪っていることへの問題提起であったが、「生徒の姿」によって、納得・同意を得ていくという手法であれば、これまでにない風を吹かせていても、潰されはしない。

学級集団づくりも、学年行事とタイアップして、「楽しい」ことを取り入れていく。そのなかで、出てきた問題を集団で話し合っ解決することを教えていく。久美子へのリュウやそのほかの男子からの差別的言動（不登校を揶揄する発言）は、随所にみられたが、今この問題を取り上げても、解決に至らないと判断し、口頭での指摘に留め、機会を待った。解決しやすい問題から、自治の力を育てていった。

④ 久美子を抑圧してきたものの正体との対峙

3学期、久美子はかなり安定してきて、居場所となる小集団もできた頃、男子からの迫害を訴えてきた。エンパワメントされてきたが故の行動である。（しかし、たじろいだ私がいたことも確かだ）さあ、新自由主義的な思想を持つ層の生徒と、根っこの部分での対峙し、切り込むときが来た腹を括る。

久美子への事実確認と、指導の保留の了承、そしてP4Cでの対話と久美子へのケア、共同グループとしての結束と翌日の作戦会議、他のグループの生徒への個別の聞き込みなどを行った。その際、他のグループの女子が「私は1年生のときから久美子と同じクラスで、これまで、何度も違和感のある言動を見聞きしてきた。けど、それは触れてはいけないことかなってスルーして、面白くないけど笑ってその場をやり過ごしてきた。

でも、そんな自分の行動が怖くなった。私は久美子の味方でいたい。」と言ってきたことが、この学級集団に健全な価値観が根付いていることへの確信をくれた。

そして、管理職と学年主任へ報告し、指導の方向性を伝え、家で翌日の構想を練った。

翌朝、担任からの発信、関連した生徒からの聞き取りと個別指導、そして学級討議。(この場面で、久美子の生活現実の苦悩が久美子の声によってオープンになる)放課後のP4Cでの総括と今後の展望、「(体育の着替えのとき悪口言っている人はいなかった)」というアキオの発言に拍手をし合う)、翠とは久美子の来歴の苦悩を共有した。翠が「久美子が、謝ってくれたけど、どうでもいいって言ってました。」と久美子のことを心配して、私に言いに来たので、私は「翠から、小学校の頃から久美子へのいじめがあったと聞いてた。他の人なら、謝ってくれたら、もう良いよってできるけど、久美子はこれまで深く傷付いてきたから人を信じるのが難しいと思う。時間がかかると思うよ。ディオニスみたいだね。でも、翠の存在がきっと久美子の支えになってるよ。」と返答した。

この日の指導は、ヒリヒリするような学級集団との対峙場面であった。個別に呼び出して指導し加害生徒に謝罪させ、穏便に済ませることを望んでいた管理職には、チクリと批判された。しかし、指導をみにきていた学年主任が、その内容の正当性と学級の生徒の真剣な議論を高く評価したため、大きく問題視されることはなかった。

この指導に踏み出す際、電話で相談した方から、「クラスの安心感・正義があるから、初期段階で、生徒たちが、正直に言ったり、自分の気持ちを担任に話したりというアクションが取れたはず。…みんなの場で起こったことは、みんなの場で解決する。正攻法でいけば、しっかり受け止めてくれるクラスと生徒たちであるはずだ。」と、言い切ってもらえたことに、背中を押された。

真価が問われる勝負となる場面であった。久美子を抑圧してきたものの正体は、私も含めた集団そのもののもつ、自己責任による弱者排除の構造的暴力であったといえるのではないかと。私は、3学期の学級解散を目前に、やっと久美子の声を本当の意味で拾い上げ、集団の質を問うことができた。この問題を集団的に解決した経験が、今後の学級1人ひとりの生徒たちにとって、「いじめ傍観者」としてあった自己を問い返し、どこかでいつか「いじめられる存在」となったときにも、声を上げ立ち上がれる、セーフティネットとしての貴重な場面である。しかしその一方で、もし正義の通らない集団状況であれば、その状況に応じた指導が必要である。なぜなら、この指導が響かないとき、「弱者は排除されて当然である」という価値を返って植えつけてしまう危険性すらあるからだ。その場合も、決して諦めず(期待せず)時間をとことんかけて、粘り強く違った方法で解決へと取り組むだろう。

7、実践の到達点と課題

久美子の苦悩がオープンになるのは3学期であった。それまで、そもそも1年時の私は、久美子の苦悩を「看過」してきたのだ。そして、2年時から担任し、久美子への男子の嫌な態度に気づきながらも、十分には切り込むことができずに「指導を先送り」してきていた。(もちろん、勝てない勝負に果敢に挑むのではなく、綿密な根回しと、久美子の側の集団に力を付けていく期間であったと、位置付けているけれど。)

包摂と排除そして、忘却の分断線に立たされながら、久美子の苦悩に共感しながらも、手を引き上げられずにいる悔しさは、いつだって自己内葛藤として在り続けていた。

この軋轢に耐え、久美子の謎に直面しながら、いつか来るであろう勝負のときに備える。大きく展開する実践場面へと確信をもって進むためには、時間が必要である。2013年のインタビューで「(Kが実践の中で成長をしていくことを)若い先生は待たせてもらえない」と、藤木さんが述べていたことを思い返す。

また、久美子の事象は、今の現場では「重大いじめ事案」などと捉えられ、厳しい批判(〇〇学級は荒れている)にさらされたり、子どもたちの成長とは全く別の方向(上辺だけの謝罪・久美子への排除の世論が潜在化していく(無関心など))に指導が上滑りしてしまったりすることもある。このような場面では、より強い管理を呼び込み(久美子の見守りという名もとの周辺生徒への監視など)、子どもたちの世界をますます息苦しくしてしまう可能性がある。

このような情勢に対決し、教員としての主体性をもってこれらの場面に挑みかかるには、集団分析、そしてKの過去の「傷」への着目とその分析、そして未来を見据えた実践構想をもつことが必要だ。久美子はこの後、「学校」を自立の本拠地にして、母や家族を相対化しながら、同世代の友人とのつながりのなかで、見違えるように成長を遂げていく。(本来の彼女は、逞しく賢い子なのである)関係の悪かった桜とも同じバレーボールチームで楽しくプレーすることができ、学級最後のお別れレクでは、ビンゴ大会の景品を持ち寄り、男女ともに、大喜びして過ごしていた。

しかし、「学校」は相変わらず、また新たなKを生み出し続けている。Kが「学校」をゆるがさない限り、放っておかれる状況には変わらないのだ。私もまた、こぼれ落ちていく砂を拾い集めるような無力感にさいなまれながら、一掴みでも握った砂を取りこぼさないでしようと踏みとどまっているにすぎない。

今、「学校」は多くの一般生徒が「不登校・ひきこもり」となり得るほど、狭量化している。それは、枠が狭すぎるが故の事象であるとするならば、愚直に丁寧に、生活指導の実践を積み重ねることによって、現代の「学校」で「忘却」されている生徒の幸せを拓く世界を生み出すことは、かなりの高確率で可能であるともいえる。

私の実践の弱さは、教員集団の核の思想をゆるがすほど、新自由主義的な職場の価値観を転換できなかったところである。久美子の成長に必要であった実践は何かということ発信し切れていないところである。だからこそ、「学校」の息苦しさは何ら変わりない。悔しさはあるが、一緒に集まって、学校分析をしながら、踏み留まって、抗ってきた、ごく少数の同僚と「勝てないけど負けない」たたかいを、これからも続けていきたいと思っている。